

学校訪問 鳥取県立鳥取西高等学校

所在地 〒680-0011 鳥取市東町2丁目112
訪問者 5名
訪問日 平成29年11月1日・2日
対応者 副校長・教頭



① 学校概要

明治6年に開校し、平成25年には創立140周年を迎えた伝統ある学校である。校舎を鳥取城跡に建て、校舎から城の石垣を見ることができ大変素晴らしい景観が印象的だった。また29年に校舎が全面改修され、きれいな校舎で生徒は学習に励んでいた。平成27年に5年間のスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け、ICTの活用や韓国・オーストラリアの海外の大学との提携をする中で、グローバルな社会課題に関して協働的・探究的な学習を行っている。生徒総数882名で男子が467名、女子が415名で2年時より文系と理系に分かれる。「文武併進」の教育方針のもと多くの国公立大学、難関私大へ進学し、部活動でも全国大会に出場するなど実績を上げている。

② 鳥取西高等学校の「協動的な学び」「アクティブ・ラーニング」を含めた、授業改善への取り組み

ア 導入の経緯 以前の授業の問題点

- 1) 教員中心の詰め込み型授業
- 2) 過度な小テストや課題により生徒は教員が与えるものをこなす状況
- 3) 生徒が自主・自律的に学習をしているとはいえなかった

イ 改善策

- 1) 授業とは何か？授業で生徒の「学び」が起こることが大切
- 2) 生徒の「学力」到達度を測る、指導と評価の一体化が大切

ウ 授業改善への取り組み

- 1) 「英語力を強化する拠点校事業」(平成24年度～)

Can-Do-list(3年間の到達目標)の作成や短期目標を設定し、ルーブリック評価を導入している。従来の筆記試験だけではなくパフォーマンス評価を取り入れ、その割合が10%から年々増加し、現在50%となっている。

- 2) 学習科学理論研修

鳥取県教育委員会が主催する研修会に各教科1名が参加し、協働的・探究的学びやジグソー法を学び、校内で共有している。

教員間での共有を図る。

- 3) 「思索と表現」課題研究

毎週水曜日の「総合の時間」で生徒がテーマを決める課題研究を全校体制で行っている。

現在はSGHの指定も受け、協調型プロジェクト学習として、学年の枠と取り除き2,3年

生縦割りで研究班を編成し取り組んでいる。

③ 授業見学

《理科》

・理科では特に i-pad 等の ICT を活用した授業が印象的だった。物理の振り子の実験では i-pad の「ウゴトル」というアプリを使って振り子の動きや要した時間を記録して実験プリントに書き込んでいた。また生物の授業では人の骨とニワトリの骨から進化の仕組みについて学ぶというテーマだったが、各班に複数のニワトリの骨を用意し、各班で組み立て、骨の構造を予想させ、写真に撮り、前方のホワイトボードに映し出し、各班の様々な予想と比べ、議論するという Knowledge Forum という手法を用いていた。生徒同士はその過程で本当に楽しみながら、自分の考えや予想を仲間に伝えたり、仲間と議論を行っていた。それを引き出す教材や教師の仕掛けが本当に素晴らしいと感じた。

《数学》

- (1) 話し合いのグループは、どのクラス（1年、2年）であっても4名であり、話し合うのに適切な人数だと感じた。話し合いについて生徒は慣れており、通常の授業でも常に行っている様子が見えられた。
- (2) 先生方が生徒に“考えさせるための質問”を常に用意されていた。その中で生徒と教員の双方向のやりとりが行われていた。質問の質は高く、生徒が簡単に考えられるような質問や、熟考するような質問も使い分けておられ、事前によく研究されていると感じた。
- (3) 生徒に与える課題（問題も）、良問が選択されており、生徒は興味・関心をもって考えていた。大学入試問題など、総合的な問題に取り組みせており、生徒の意識を高めうえで、この学校（学力レベルの高い鳥取西高）ならでは取り組みだと感じた。生徒がよく考え、次の段階に繋げていける問題の選択で、大学入試問題についてよく研究されていると感じた。

《地理歴史》

・ICTを活用し、調べ学習の発表を行っていたが、ポイントをしっかりと押さえた内容で、資料自体も分かりやすくまとめられていた。

・評価については、ルーブリック評価表を作成し、生徒同士で評価しあう形を取っていた。

・教科融合型の授業であった。英文を読んで、記述されている事象を地図上に記録し、都市の形成過程を理解させるものであった。生徒の力量をしっかりと把握し、教材研究がしっかりとされている感じがかった。



ICTを使った社会の授業例

《国語》

・今回、現代文、古典、漢文と見せていただき、その要所に AL が取り入れられていた。その中でも「書くこと」を通して思考を深めることが随所に見られ、書くことで明確な思考や意見を持ち、自信を持って対話に参加することに繋がると感じた。

例えば、現代文と漢文では、大きな問に対してまずは自身で考え、仲間と説明し合って考えを深めた後に「リライト」という名でもう一度同じ問に答えるという活動を取り入れていた。それにより活動後に以前より深まった内容を目にすることで、AL に取り組んだ目的・価値というものがより実感できるのではないかと感じた。

《課題研究》

・H26よりSGH指定に合わせて「思索と表現」の時間として取り組んでいる。1年生はクラスごとだが、2、3年生は縦割りのグループで実施している。3年生の入試を考慮し、4月～7月に総合学習の時間のまとめを行っている。その結果、外部講師の依頼や校外での活動などが行いやすくなっている。2、3年生の発表形式については文字だけでなく、図やグラフなどを効果的に用いたポスターを作製させていた。

④ 最後に

2日間にわたる訪問であったが、副校長先生をはじめ、教頭先生には大変お世話になった。ループリックに関しては英語以外は製作途中だったが、5年くらいをかけて多くの教科に広がっていくとのことだった。またICT化が進んでおり、教員のパソコンと各教室のパソコンがリンクしており、ほぼすべての授業で授業プリントを配布するのに加え、ホワイトボードに内容を投影し、そこに書き加えたりしていくといった授業展開が多くみられ、そのための教師の準備が素晴らしかった。また学校に約100台のi-padがあり、多くの授業でi-padを用いて動画を見せたり、写真を使ったり、意見交流するのに使ったりといった、先進的な授業が展開されていた。鳥取西高校は県の情報システムとは違う独自の回線を引いているため、Youtubeなどを含め、規制のかかるものでも授業のために使うこともできるということも聞くことができた。

各教科内の教員内でも、授業の教材に関してデータが共有されており、だれがやっても質の高い授業が同じようにできるということだった。教員の発問一つとっても何を聞きたいのか、また何を考え、議論させたいのかが明確で、本当に良く授業が練られており、質の高さを感じた。定期考査でも英語では初見の問題を用意したり、高大接続に向け、論述を増やしたり、教科統合型の問題を取り入れたりと挑戦し続けている。今回見せていただいた授業はAL型が多かったが、知識がないと考えられないことが多く、これまでのいわゆる知識伝達型の授業も行われている。

現在の課題は、生徒が多くのアイデアを持っているため議論が白熱して意見の集約ができない場合など、必ずしも教員の用意した授業展開、ストーリー通りに進まないことがあるとのことであったが、羨ましい悩みでもある。

このように、今回の学校訪問は改めて現在の本校の取組を見直すとともに、今後の研究に向けてとても示唆に富んだ実りの多いものであった。